

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会
発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：220部
つつじが丘：440部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：30部

加害獣を特定した 獣害対策

シカの稲作に対する具体的な被害としては、田植え後の稲の葉先の食害や、稲穂が実った頃に田圃に侵入し稲を踏み倒すという被害が多かったのですが、近頃では登熟期の穂が食害を受けるといふ、今まで矢川近辺では、なかった被害が発生しています。

果たしてこれがシカの仕業か？

野生鳥獣に効果的な対策を行うためには、加害個体を正確に特定する必要があります。それには、足跡やフンなどの痕跡も同時に探し、総合的に判断することが重要になります。登熟した稲穂を食害する動物はイノシシやシカ、サル、カモシカ、野ウサギなどが挙げられます。鳥類は全て稲穂を食べますが、籾殻を残すなど食痕で判別できます。



穂をかじられて酷いことになっています。
名張市矢川で2019/08/23撮影

田の畦からの食害でサルの仕業とも考えられます。野ウサギも疑われますが、この近辺では野ウサギの出没は極めて少ないです。このように被害形態や痕跡による加害個体の判別は非常にむずかしいです。



野ウサギなどが挙げられます。鳥類は全て稲穂を食べますが、籾殻を残すなど食痕で判別できます。

だが、イノシシによる水稲被害形態は一目瞭然です。イノシシに水田に這入られると、その水田1枚の稲がほとんど倒されてしまっています。稲穂を歯でしごいて食べたり、寝転がりまわって（又たを踏む）倒します。風で倒れるのとは違い、稲穂が完全に地面につくまで倒してしまうので、雨が降ると発芽したり腐ってしまい収穫出来ません。また、収穫できたとしても獣臭が強く商品になりません。

シカによる水稲被害は、移植後から分けつ期の柔らかい水稲の葉先の食害と、刈り取り前の踏み倒し被害が主だったのですが、今のところシカとは断定はできませんが、今年稲穂の食害が多く発生しています。

鳥類の殆どは稲の乳熟期に食害が集中しますが、食べ痕だけを見て「これは何鳥の食べ痕や」と判定できる人は少ないでしょう。

近頃では、大型獣（シカ・イノシシ・サルなど）に対する対策関係者の知識が高まり、加害獣の識別が出来るようになってきました。一般的にはハードルが高いです。

また、アライグマは水稲の苗や苗床を荒らします。

葉菜類（キャベツ・ホウレンソウ・レタス・セロリなど）は、苗から収穫期までの全期間シカの食害を受けます。サルの食痕は、果菜類（キュウリ・カボチャ・

中型獣によると思われる家庭菜園被害が増えてきて関心が高まっています。日本で獣害を及ぼしている中型獣としては、キツネ、タヌキ、ウサギ、テンなどの在来種に加え、アライグマ、ハクビシン、ヌートリアなど外来種です。家庭菜園を荒らす加害個体はシカやイノシシ、サルの大型獣からモグラ、ノネズミなどと多岐にわたり、その判別は更に困難になります。

トマト・ナスなどがひと口かじって「ポイツ」とされていたら、サルの可能性が高いです。食べかすを放つたりするのにもサルの仕業です。農家はサルの食べ方を見て「食べ方が気に入らん」と怒ります。サルは集団でやってくるため、想像以上に大きな被害になります。

ここで外来種のアライグマ、ハクビシン、タヌキのトウモロコシの食害形態を比べてみましょう。

タヌキの食べ跡は、アライグマと同様に茎を倒し、実を食べるが、土がついた部分は食べない。写真②

ハクビシンの食べ跡はトウモロコシの茎を斜



写真①

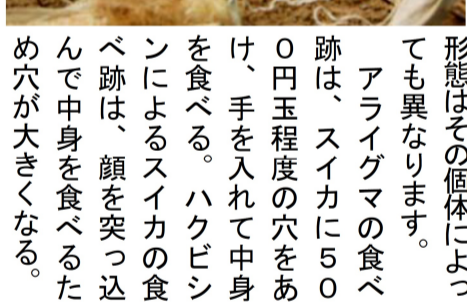
アライグマの食べ跡は、茎を倒し、外皮を剥いてきれいに食べる。

スイカに対する被害形態はその個体によっても異なります。アライグマの食べ跡は、スイカに500円玉程度の穴をあけ、手を入れて中身を食べる。ハクビシンによるスイカの食べ跡は、顔を突っ込んで中身を食べるため穴が大きく開く。

トマト・ナスなどがひと口かじって「ポイツ」とされていたら、サルの可能性が高いです。食べかすを放つたりするのにもサルの仕業です。農家はサルの食べ方を見て「食べ方が気に入らん」と怒ります。サルは集団でやってくるため、想像以上に大きな被害になります。

タヌキの食べ跡は、アライグマと同様に茎を倒し、実を食べるが、土がついた部分は食べない。写真②

ハクビシンの食べ跡はトウモロコシの茎を斜



写真②

アライグマの食べ跡は、茎を倒し、外皮を剥いてきれいに食べる。

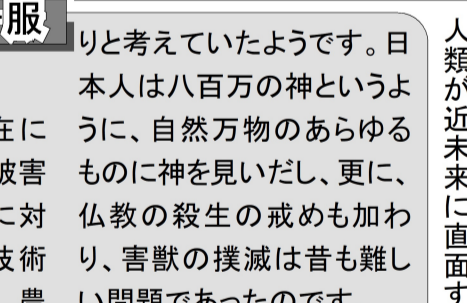
スイカに対する被害形態はその個体によっても異なります。アライグマの食べ跡は、スイカに500円玉程度の穴をあけ、手を入れて中身を食べる。ハクビシンによるスイカの食べ跡は、顔を突っ込んで中身を食べるため穴が大きく開く。



写真③

タヌキの食べ跡は、アライグマと同様に茎を倒し、実を食べるが、土がついた部分は食べない。写真②

ハクビシンの食べ跡はトウモロコシの茎を斜



写真②

アライグマの食べ跡は、茎を倒し、外皮を剥いてきれいに食べる。

スイカに対する被害形態はその個体によっても異なります。アライグマの食べ跡は、スイカに500円玉程度の穴をあけ、手を入れて中身を食べる。ハクビシンによるスイカの食べ跡は、顔を突っ込んで中身を食べるため穴が大きく開く。

トマト・ナスなどがひと口かじって「ポイツ」とされていたら、サルの可能性が高いです。食べかすを放つたりするのにもサルの仕業です。農家はサルの食べ方を見て「食べ方が気に入らん」と怒ります。サルは集団でやってくるため、想像以上に大きな被害になります。

殺生戒
太古から現在に至るまで、甚大な農業被害をもたらしている害獣に対する対策は、資材や技術に乏しかった時代でも、農民たちは様々な工夫をこらして防除を図っていたようです。それなのに何故人間は害獣撲滅に効果的な対策を打ち出せなかったのでしょうか。現在の最新の技術なら退治できそうなのに、そうはなっていないのは何故でしょう。

日本は八百万の神というように、自然万物のあらゆるものに神を見だし、更に、仏教の殺生の戒めも加わり、害獣の撲滅は昔も難しい問題であったのです。日本のあちらこちらに江戸時代建立の猪塚見られます。農民が捕らえたイノシシを供養した慰霊碑です。このような塚を築いた理由は、人間側の害獣への仏心があったからだと考えられます。いまだに害獣を徹底的に撲滅することができない理由は、こうしたところにあるのかも知れません。これは人間が自然に持つ慈悲の心で、決して悪いことではありません。無謀な殺生は慎みましょう。

地球温暖化に伴う気候変動は紛れもなく、人類が近未来に直面する最大の脅威のひとつだといわれています。気候変動の要因には自然環境の変動は、すべからず人間活動に由来している可能性が高いと考えられています。

地球温暖化による気候変動が忍び寄ってきています。「ホーホケキョ」というウグイスの囀りの時期が早まってきているように感じるのには私だけでしょうか。

地球温暖化に伴う気候変動は紛れもなく、人類が近未来に直面する最大の脅威のひとつだといわれています。気候変動の要因には自然環境の変動は、すべからず人間活動に由来している可能性が高いと考えられています。

地球温暖化による気候変動が忍び寄ってきています。「ホーホケキョ」というウグイスの囀りの時期が早まってきているように感じるのには私だけでしょうか。

殺生戒
太古から現在に至るまで、甚大な農業被害をもたらしている害獣に対する対策は、資材や技術に乏しかった時代でも、農民たちは様々な工夫をこらして防除を図っていたようです。それなのに何故人間は害獣撲滅に効果的な対策を打ち出せなかったのでしょうか。現在の最新の技術なら退治できそうなのに、そうはなっていないのは何故でしょう。

日本は八百万の神というように、自然万物のあらゆるものに神を見だし、更に、仏教の殺生の戒めも加わり、害獣の撲滅は昔も難しい問題であったのです。日本のあちらこちらに江戸時代建立の猪塚見られます。農民が捕らえたイノシシを供養した慰霊碑です。このような塚を築いた理由は、人間側の害獣への仏心があったからだと考えられます。いまだに害獣を徹底的に撲滅することができない理由は、こうしたところにあるのかも知れません。これは人間が自然に持つ慈悲の心で、決して悪いことではありません。無謀な殺生は慎みましょう。

地球温暖化に伴う気候変動は紛れもなく、人類が近未来に直面する最大の脅威のひとつだといわれています。気候変動の要因には自然環境の変動は、すべからず人間活動に由来している可能性が高いと考えられています。

地球温暖化による気候変動が忍び寄ってきています。「ホーホケキョ」というウグイスの囀りの時期が早まってきているように感じるのには私だけでしょうか。

地球温暖化による気候変動が忍び寄ってきています。「ホーホケキョ」というウグイスの囀りの時期が早まってきているように感じるのには私だけでしょうか。

最近、アマゾンの熱帯雨林火災が大きく報道されていますが、火災の原因は、自然発火や失火ではなく、農地拡大のための人為的なものであるといわれています。耕作のために森林を伐採したりする活動は世界各地で、特に熱帯地域で盛んに行われていますが、森林がなくなるということは、即ち、二酸化炭素の増加につながるのです。環境の温暖化に伴って、生きものの世界にも変化が起こります。気候変動による動植物への影響は既に現れており、野生哺乳類の増加や分布域の拡大が見られます。

非常に高まっています。温暖化に伴い農業形態も考え直さなければならぬ時期なってきました。比較的高緯度地域である東北・北海道では生産量の増加がみられ、関東以南の低緯度地域では高温による生育障害が起こることが予測されています。東北・北海道地方で栽培期間を早める一方、これ以外の地方では栽培期間を遅くする必要が生じ、獣害対策を講じる時期も変わってくるものと思われます。また、冬季の気温が上昇することにより、昆虫の越冬可能地域が北へ広がり、昆虫分布が北上することが予想されています。

また、地球上に生息する全ての生き物たちにも個体の減少や絶滅する種が出てきたり、一方で生息域を広げ数を増やすものも出てくるのが予測されます。中山間地域ではここ10年程前から国の補助金などを活用して、集落全体を囲う集落柵を設置する集落が増えています。だが、正しく囲っていない柵が多々見つけられます。困っているつもりでも動物に効果のある囲

みになっていない、設置当初は効果があっても次第に効果を失っていく柵など管理体制にも問題があります。また、獣種によって必要な柵は違います。集落柵設置の背景には、動物は森で、人間は里山できちんと住み分けを図るという目的があたはずです。しかし、住民が当初予想していたような効果が上がっていないという現状です。防護柵とは、里へ下りてくる野生獣を水際で食い止める最終防衛ラインで、被害域が防護柵のない無防備な集落へ移動するといふリスクは回避出来ません。野生鳥獣が集落に出没する理由は餌を食べに来るためです。集落内の収穫残渣や不要果樹などの餌場を無くすることが先決問題です。これには農家だけでなく集落住民と協力して取り組んでいくことが大切です。

う事態が起こっています。集落柵は、林縁に沿って設置することが原則です。二つには、農地の周辺に野生動物が安全と感じる耕作放棄地など隠れ場所が増えたことです。耕作放棄地拡大には、深刻な諸問題が存在しますが、放牧地や管理不足の藪などが野生動物が人に姿をさらすことなく農地に近づける環境を提供していることになり、早急な耕作放棄地の改修が必要です。三つには、河川や主要道路など閉鎖できない箇所の問題などがあります。同一集落内でも住民間では獣害に対する意識や考え方も異なり、有効な対策も集落ごとに異なります。今後は、住民自らが取り組む意識を高め、集落全体としての合意形成や共通認識を持ち効果の上がる集落柵対策に当たることが重要になります。

秋は、春と並んでサルにとっては食べ物の豊富な季節です。自然界の食べ物は何年かに一度大豊作があったり、逆に大凶作に襲われることがあります。大凶作の年では農作物に大きな被害が及ぶことがります。冬は、寒さもさることながら、食物不足をどうして乗り越えればよ

いかが最大の問題です。冬場は、他の季節よりも大胆に農地や集落に出没します。取り残しの野菜や果樹など、餌を無くすことが重要になります。秋から冬にかけては交尾期にはいりません。出産期は春から夏です。2〜3年に1頭の割合で出産しますが、餌を農作物に依存したり、自然界の餌が豊富にある年は年1頭ずつ産むこともあるといわれています。寿命は20歳前後です。

名張A群の状況 (古川 高志さん報告) 8月中旬〜9月中旬のA群は、青蓮寺湖と比奈知湖周辺を交互に行き交う行動をしています。途中の上比奈知集落では柿の被害が多数発生しています。つつじが丘では、南8番町付近の山裾の栗を狙っての出没が多発しています。この時期山栗を食べるため、奥山にいくことが多く、発信機の受信範囲から外れることが多々あり調査に苦労しています。ここ数年行かなかった青蓮寺ブドウ園の1号園付近に数回出没があるなど、行動域に変化が見つけられます。今後の調査には、この変化に注目しながら調査をしたいと考えています。

集落を守れていない 集落柵

野生動物の侵入を完全に押さえ込むことは

秋は、春と並んでサルにとっては食べ物の豊富な季節です。

名張A群の状況 (古川 高志さん報告)

秋は、春と並んでサルにとっては食べ物の豊富な季節です。

名張A群の状況 (古川 高志さん報告)

秋は、春と並んでサルにとっては食べ物の豊富な季節です。

サル出没状況

名張A群の状況 (古川 高志さん報告)

秋は、春と並んでサルにとっては食べ物の豊富な季節です。

名張A群の状況 (古川 高志さん報告)

秋は、春と並んでサルにとっては食べ物の豊富な季節です。

